



□資料紹介

『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』ヘンリー・K・ミラー 編集

翻訳 宮城学院女子大学名誉教授 飯塚 久榮

この度、ここに紹介する資料は『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』の

- ・ EDUCATIONAL WORK Miyagi Girls' School
- ・ WOMAN'S WORK Bible Women's Work
Charity and Hospital Work
Evangelistic Work by Girls' School Teachers
Evangelistic Work by Wives of Missionaries,
Pastors and Evangelists

という部分です。本学名誉教授である飯塚久榮先生に翻訳していただきました。

刊行された1904（明治37）年は、合衆国改革派教会が日本伝道において25周年を迎えた記念すべき年でありました。ミッションのこれまでの働き、そしてこれからの必要性や展望について、仙台で活躍している宣教師たちにより書き記され、編集を行ったH.K.ミラー（第四代宮城女学校校長）は、日本伝道の25年間の自分たちの物語をここに書き記したと序文で述べています。今回資料室年報でご紹介いたしますのは、いずれも、宮城女学校とかかわりの深い婦人宣教師によって書かれた章であります。特に、バイブル・ウーマンとして実際に活動した宮城女学校の卒業生たちが顔写真と名前入りで紹介されているのは大変貴重であり、バイブル・ウーマンとして使命を感じ婦人宣教師と共に奉仕活動を行っていた卒業生の記録を、飯塚先生の翻訳によって多くの方にご紹介できますことを心より感謝申し上げます。

資料室 佐藤亜紀

略年表 (1881～1910)

- 1881(明治14)年 5月 1日 ・ 仙台教会(現仙台東一番丁教会)創立
- 1886(明治19)年 5月15日 ・ 仙台神学校(現東北学院【TG】)開校
- 7月16日 【MG】 E.R.プールボー、M.B.オールト着任
- 9月18日 【MG】宮城女学校開校
- 9月24日 【MG】授業開始
- 10月11日 ・ 宮城英学校(東華学校)開校
- 1887(明治20)年 1月 ・ 東京電灯会社、初めて点灯
- 4月 【MG】仙台区東三番丁162番地～169番地に校地購入
- ・ 第二高等中学校(旧制第二高等学校)創立
- 12月15日 ・ 東北本線上野塩釜間開通
- 1888(明治21)年 ・ 国歌「君が代」制定
- 1889(明治22)年 2月11日 ・ 大日本帝国憲法発布
- 7月 ・ 東海道本線開通
- 7月 5日 【MG】校舎献堂式
- ・ 北里柴三郎、破傷風血清療法の発見
- 1890(明治23)年 【MG】日本人男性を幹事として採用、半年後宗教教育で越権行為
- ・ 教育勅語発布
- 1891(明治24)年 ・ 仙台神学校、「東北学院」と改称【TG】
- 11月 【MG】 M.C.ハロウエル着任
- 【MG】生徒から教育内容についての要求
- 1892(明治25)年 1月21日 【MG】「いわゆるストライキ」事件により生徒5名退学処分
- ・ 東華学校廃止
- ・ 現尚綱学院創立
- 1893(明治26)年 6月26日 【MG】プールボー校長送別会
- 6月29日 【MG】第一回卒業式(卒業生4名)
- 7月 【MG】プールボー姉妹帰国
- 7月22日 ・ 文部省訓令第八号「女子教育ニ関スル件」公布
- 9月 【MG】 J.P.モール、第二代校長就任
- 1894(明治27)年 6月29日 【MG】第二回卒業式(卒業生1名)
- 8月 1日 ・ 日清戦争(～95.3)
- ・ コレラの流行、天然痘の流行、地震の頻発
- 9月 2日 【MG】 L.ズーフル、第三代校長就任

- 1895(明治28)年 6月29日
 - ・東北学院に「労働会」設立【TG】
 - 【MG】第三回卒業式(卒業生5名)
 - 【MG】生徒10名退学処分
 - ・仙台市に電灯がつく
 - ・コレラ流行
- 1896(明治29)年 5月
 - 【MG】漢文教員退職
- 6月15日
 - ・三陸海岸地震、大津波(35,000人死亡)^{注1}
- 6月21日
 - 【MG】第四回卒業式(卒業生3名)
- 9月18日
 - 【MG】宮城女学校創立満十年の日
 - 【MG】創立十周年式典
- 1897(明治30)年 6月29日
 - 【MG】第五回卒業式(卒業生2名)
- 8月
 - 【MG】L.M.ロールボー着任
- 9月
 - 【MG】バイブル・ハウスが校地内に建設
 - ・「河北新報」創刊
 - ・現宮城県宮城第一高等学校創立
- 1898(明治31)年 6月29日
 - 【MG】第六回卒業式(卒業生1名)
- 11月26日
 - 【MG】教科課程改正 本科を4年から5年に延長
- 1899(明治32)年 6月29日
 - 【MG】第七回卒業式(卒業生5名)
- 10月 9日
 - 【MG】ゾーフル校主就任
 - ・高等女学校令公布
 - ・私立学校令公布
 - ・文部省訓令第十二号公布
- 1900(明治33)年 3月
 - 【MG】ロールボー健康を害し帰国(後に退職)
 - 【MG】一年制聖書専攻科設置
- 6月11日
 - 【MG】S.L.ワイドナー着任
- 6月29日
 - 【MG】第八回卒業式(卒業生11名)
- 9月 2日
 - 【MG】A.K.ファウスト(後の第六代校長)、妻のクリスティーンと共に来日し東北学院教授となる
- 9月
 - 【MG】L.M.パーウェル着任
 - 【MG】ゾーフル休暇で帰国 ワイドナー校長代理
 - ・現津田塾大学創立
 - ・仙台市に電話開通

^{注1}「日本災害史事典 1868-2009」では、死者数 26,360 人と発表されているが、ここでは J.P. モール夫人により書かれた死者数 35,000 人をそのまま表記することとした。

- 1901(明治34)年 3月30日 【MG】第九回卒業式(初めて卒業式が3月に行われた、卒業生8名)
- 4月 【MG】学年開始が初めて4月になる
- 7月11日 【MG】クリスティーナ(ファウスト夫人)、急病により死去
- 9月 【MG】C.B.パイファー着任
・押川方義、学院長辞任【TG】
- 1902(明治35)年 3月 8日 【MG】校舎全焼により仮校舎片平丁69番地2棟の日本家屋を借りる
- 4月26日 【MG】第十回卒業式東北学院講堂で行う(卒業生8名)
- 5月 【MG】ワイドナー病氣療養
- 8月 【MG】ズーフル帰任
- 1903(明治36)年 12月 【MG】校地購入 市内東二番丁135～138番地
- 3月 ・東北地方凶作
- 3月28日 【MG】第十一回卒業式(卒業生3名)
- 4月～6月 【MG】第十八年度授業開始延期
- 6月22日 【MG】ズーフル、ワイドナー、パーウエル連名で外国伝道局に辞任願提出
- 11月 ・「平民社」設立
- 1904(明治37)年 2月 ・日露戦争(～05.9)
- 2月 3日 【MG】ズーフル、ワイドナー、パーウエル辞任を撤回
- 6月 2日 【MG】「第一校舎」献堂式
- 7月 2日 【MG】第十二回卒業式(新校舎における最初の卒業式、卒業生4名)
- 1905(明治38)年 1月 ・旅順開城
- 3月 ・奉天の大合戦
- 4月 1日 【MG】第十三回卒業式(卒業生4名)
- 5月26日 【MG】久保田文部大臣来校視察
・日本基督教女子青年会(YWCA)創立
・ポーツマス条約調印
- 1906(明治39)年 3月 ・満州鉄道会社設立
- 3月16日 【MG】宮城女学校基督教女子青年会創立
- 3月31日 【MG】第十四回卒業式(卒業生11名)
- 1907(明治40)年 1月 【MG】ワイドナー休暇帰米
- 1月 ・「平民新聞」創刊
- 3月31日 【MG】第十五回卒業式(卒業生20名)

- 6月11日 【MG】外国伝道局、宮城女学校の運営権を「宮城女学校運営委員会」に委譲することを決議
- 9月 【MG】 K.I.ハンセン、L.A.リンゼイ来日
- 1908(明治41)年 1月 【MG】校地の西南隣接地、市内東二番丁139番地～140番地購入
- 3月28日 【MG】第十六回卒業式(卒業生16名)
- 4月 6日 【MG】ズーフル帰国のため仙台発
- 4月 7日 【MG】 H.K.ミラー、第四代校長就任
- 1909(明治42)年 3月27日 【MG】第十七回卒業式(卒業生16名)
- 8月22日 【MG】ワイドナー再来日、第五代校長就任
- 1910(明治43)年 4月 2日 【MG】第十八回卒業式(卒業生20名)
この日、日本人教職員一同と在校生一同からスクールカラーで作られた校旗が学校へ寄贈される

参考：『天にみ栄え—宮城学院の百年』1987年より

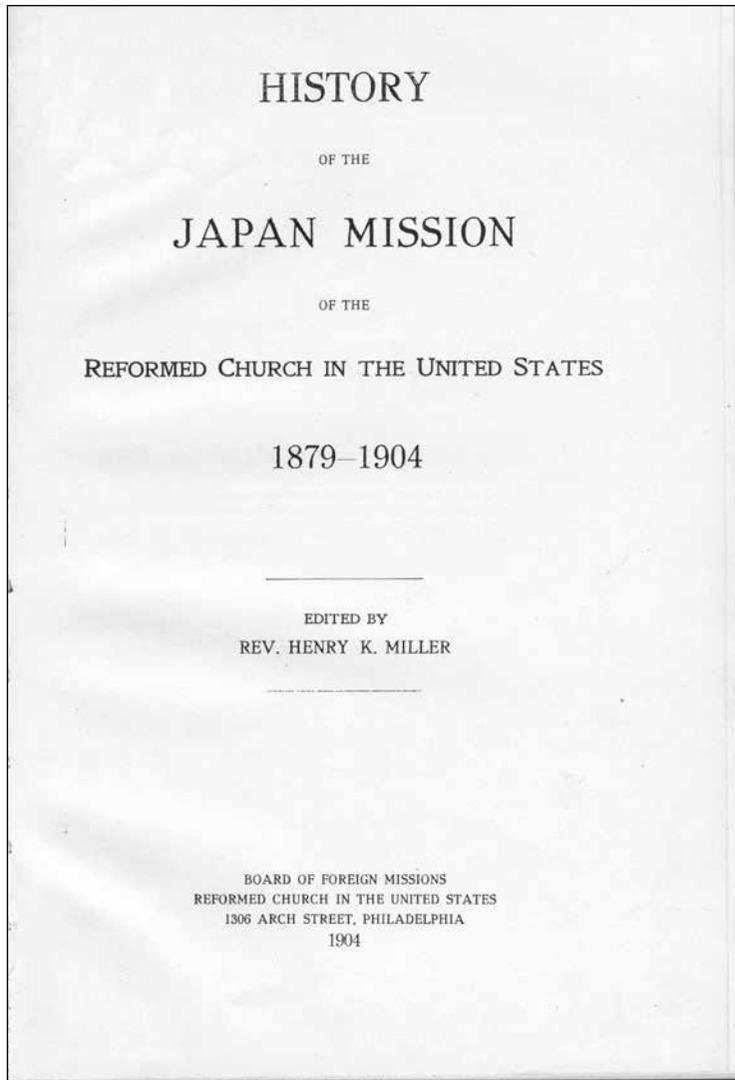
本文に登場する宮城女学校の宣教師たち

名前	宮城女学校教師就任年～退職年
	役職名、担当教科等
1. エリザベス(リズィ)・R・プールボー	1886年9月～1893年7月
	初代校長、聖書・英語
2. メアリー・B・オールト	1886年9月～1888年6月
	英語・聖書、W.E.ホーイと結婚
3. エマ・F・プールボー	1888年9月～1893年7月
	英語・聖書・音楽、 E.R.プールボーの妹
4. メアリー・C・ハロウエル	1891年11月～1898年7月
	英語・音楽
5. ジャイラス・P・モール	1893年9月～1894年8月
	第2代校長、英語・聖書
6. レナ・ズーフル	1894年9月～1908年7月
	第3代校長、聖書・英語
7. リリー・M・ロールボー	1897年9月～1900年3月
	校長代理(1899年)、英語
8. サディー・L・ワイドナー	1900年6月～1913年7月
	第5代校長、聖書・英語
9. ルーシー・M・パーウェル	1900年9月～1908年7月
	英語・聖書
10. キャサリン・B・パイファー	1901年9月～1904年9月
	英語
11. ポール・L・ゲルハード	1900年5月～1905年6月
	英語・聖書、 東北学院教師
12. ヘンリー・K・ミラー	1908年3月～1909年3月
	第4代校長、聖書、 山形・秋田へ伝道活動
13. アニー・M・モール	1893年9月～1894年7月
	J.P.モール夫人 副校長、英語・聖書

14. アンナ・M・シュネーダー	D.B.シュネーダー（東北学院第2代院長）夫人 「O MURA SAN」筆者
15. ミセズ・S・Sスナイダー	シルヴァナス・S・スナイダー（東北学院教師） 夫人

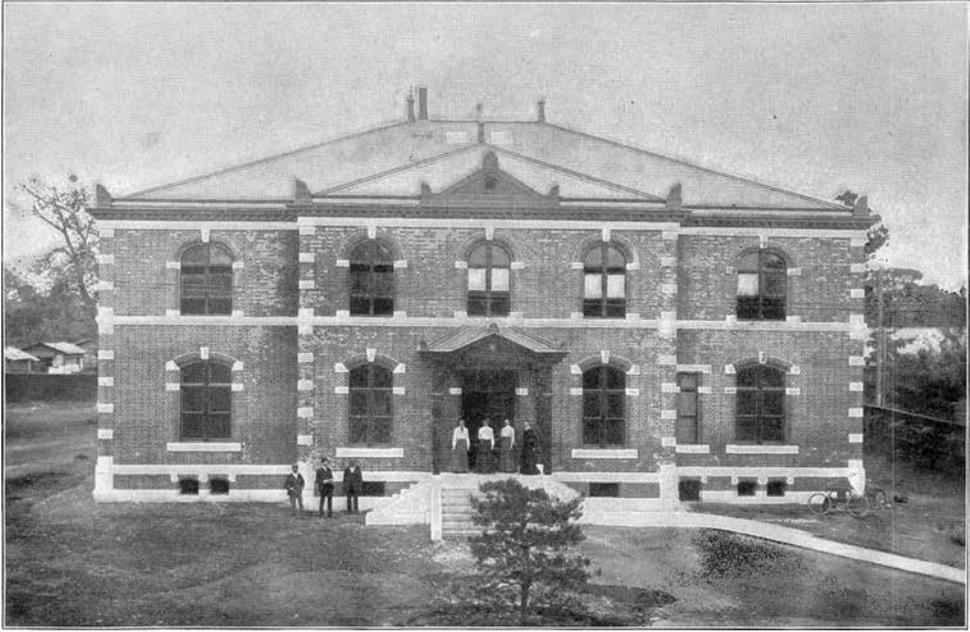
参考：

- ・「宮城学院資料室年報 信・望・愛 2011年度・2012年度合併号(第18・19号)創立125周年記念特集 宮城学院の宣教師群像 Since1886」より
- ・「東北学院百年史」(1989年)351頁より

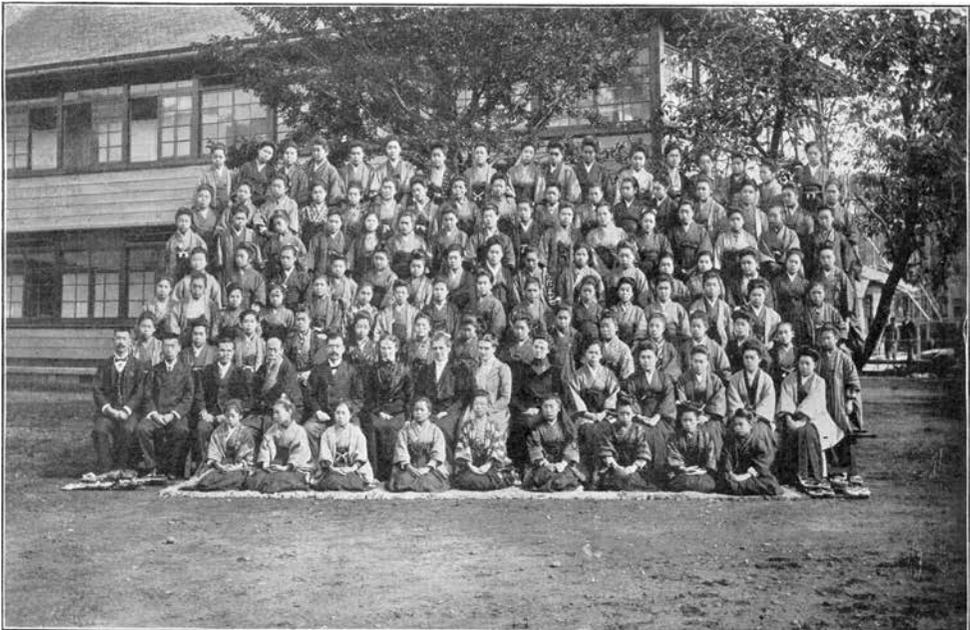


合衆国改革派教会の日本伝道における歴史
1879-1904

編集
ヘンリー・K・ミラー
合衆国改革派教会外国伝道局
1904年発行



クリスティーン・ヴォルマー・ファウスト記念館、仙台



宮城女学校の教員と生徒たち

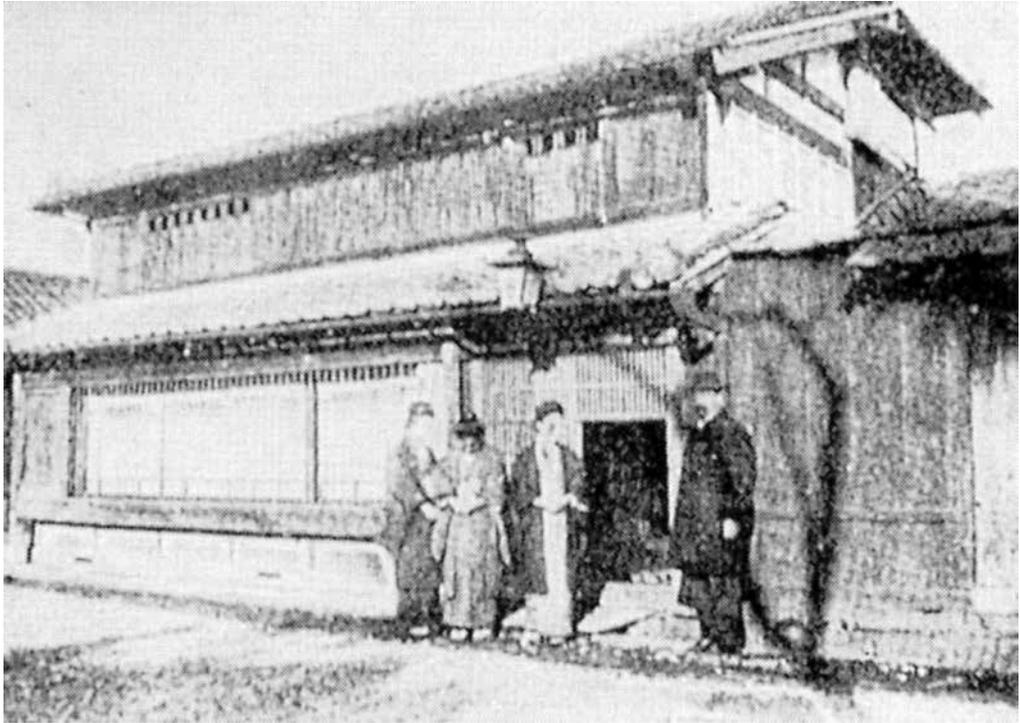
過去を振り返って

路傍の道標は、長い時の経過と歩んできた遠い道のりを示しています。いま、私たちは海外伝道活動の歩みの中で重要な時点に到達しました。ここで歩んできた道筋を振り返り、どれほどの前進を遂げたかを知ることは有益です。山登りでは時々足を止めて登ってきた道を振り返って見て、どのくらい遠くまで来たかを確認する時ほど登山者が勇気付けられることはありません。それによって登山者は自分の方位を認識し、周囲の広がりと同観をより明確に判断することができます。

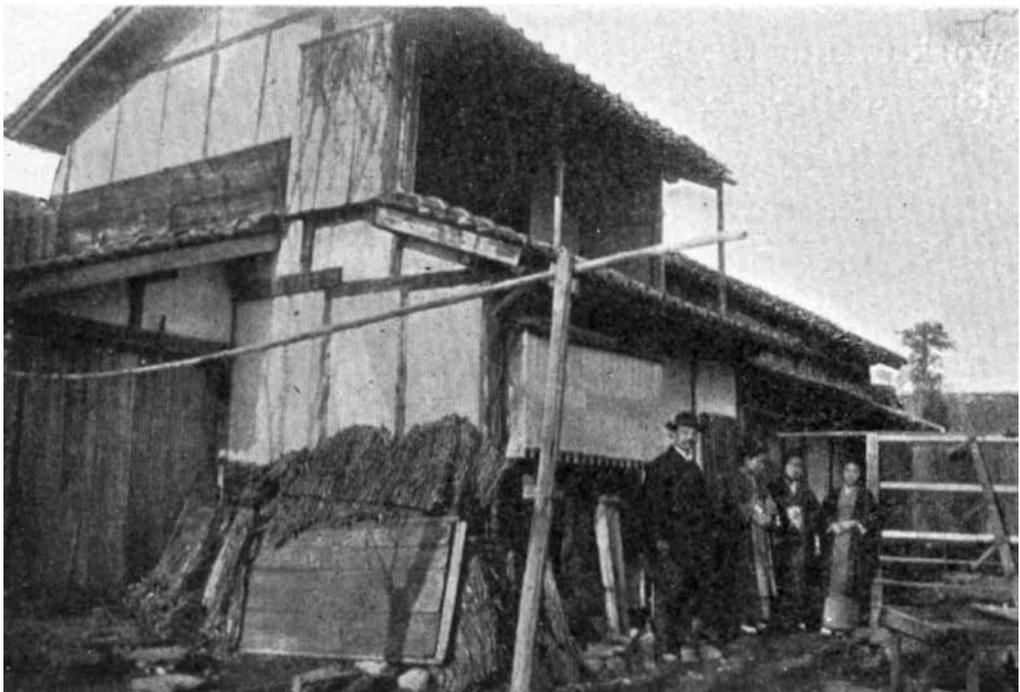
私たちの海外伝道活動の歴史においても、いまその時期に来ました。ここで一旦歩みを止めて過去を少し振り返って見ることは非常に価値があり、大きな満足を得られると思います。そうすることによって、面前の活動についてより良い見解を持つことができるでしょう。仙台の宮城女学校で、今後の宣教活動を行う術を与えてくれる教会の若い方々には、私たちの女学校の歴史について少し知っていて欲しいと思います。また同時に、かつてこの伝道活動の第一歩を踏み出し、その草創期を見守って来られた先人たちは、かの地で行った活動の成果を示す萌芽のかすかな光を得て歓喜することでしょう。まさに彼らは、ワシントン図書館（ママ）のモットー‘自ら助くることのできない者を助けよ’の標語を確実に実行しました。さらに、真っ先に我らの最初の宣教師を日本に派遣し、その成果を目撃し、幾多の尊い魂をイエス・キリストへと導く一助を担ったことを知ることは、崇高な先人たちにとってことさらに大きな喜びにちがいありません。当時は、最初の宣教師を派遣することに意味があり、そしてどこよりも先駆けて女学校を設立することが重要でした。それはこの女学校が日本の東北地方の人々が従来持っていたものと組織や目的において著しく異なるものだったからです。しかし、神は約束を守られ、神のために働く者と共におられます。ある者は種を蒔き、ある者は水をやり、そして神が豊かに実らせてくださいます！

宮城女学校の歴史

最初の婦人宣教師教師ミス・リズィー・R・プールボーとミス・メアリー・B・オールトは、1886年にアメリカから派遣され、同年、元校長職の人物が所有する日本家屋において宮城女学校を開設しました。約1年後ミス・オールトは女学校を退職し、W・E・ホーイ牧師（現在、博士）の献身的な配偶者となりました。後日ホーイ氏は中国へ転属しました。1888年、ミセズ・ホーイの後任としてミス・エマ・F・プールボーが着任し、姉のリズィーと共に二人の姉妹は熱心に且つ誠実に女学生たちを指導し、女学校をより堅固なキリスト教精神に深く基づいた学校とするために尽力しました。1891年11月、ミス・メアリ



宮城女学校創設時の教室



宮城女学校創設時の寄宿舎

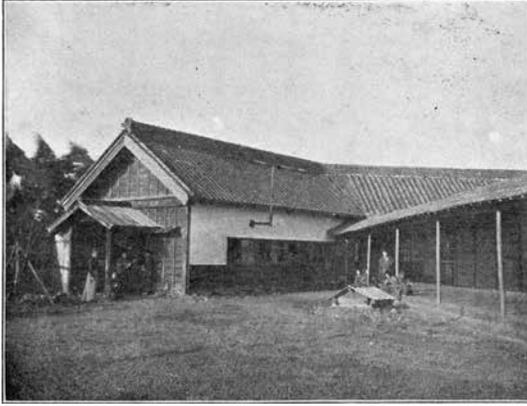
ー・C・ハロウェルが来日し、熱心に絶えず誠実に女学生の教育に彼女の青年期を捧げました。1893年7月、プールボー姉妹は帰国し、彼女らが捧げた献身的な奉職に対し教会は深い感謝の念を表しました。ミス・リズィー・R・プールボーは現在ドクター・サイラス・コート夫人となりました。同年9月にはドクター・J・P・モール夫妻が着任し、ドクター・モールが女学校の校長に就任しました。夫妻と共にミス・ハロウェルが一年の任期で着任しました。1894年8月、筆者ズーフルが着任し校長に就きました。ミス・ハロウェルと共に遂行したその後の三年間の業務内容は、教師3人が行う仕事に匹敵するものでした。1897年8月にはミス・リリー・M・ロールボーが着任し、しばらくの間（1年間）、この3人の婦人たちが女学校の‘宣教師隊’を結成していました。その後、ミス・ハロウェルが休暇で帰国し、アメリカにおいて日本の神戸に在職中のロバート・R・ジル氏と結婚しました。1900年3月には、ミス・ロールボーが健康を害して帰国を余儀なくされ、その後伝道局を退職しました。ミス・サディー・L・ワイドナーは1900年6月に着任し、同年9月、ミス・ルーシー・M・パーウェルが来日しました。1900年12月下旬、筆者が休暇で帰国、その間ミス・ワイドナーが女学校の校長職代理を務めました。1901年9月、ミス・B・キャサリン・パイファーが着任しました。1902年8月、休暇を終えて筆者が日本に帰任し、女学校の教員兼校長の職務を再開しました。在日の初年と最後の年に、ミセズ・S・S・スナイダーが音楽の授業を担当し、H・K・ミラー牧師とP・L・ゲルハート教授が数科目の授業を代講しました。ミラー氏は校長が病臥中、ゲルハート氏は校長が渡米期間中の授業を代講しました。



火事で全焼した校舎



火事で焼失した木造校舎跡



火災後の仮校舎



火災後の仮校舎



仮校舎時代のズーフル

火事

1902年3月、火災〔1902（明治35）年3月8日〕のため全校舎が焼失し、その後1年間宮城県の前知事が一部厩舎として使用していた建物で授業を続行しました。追加の校地が購入され、1903年1月24日には正式に女学校の所有地となりました。W・E・ランペ牧師の懸命な尽力により、広くて設備の整った新しい寄宿舎が無事完成し、9月1日までは入居できる運びとなりました。縁が御影石で装飾されたレンガ造りの立派な会堂「クリスティーン・ファウスト記念館」の礎石が1903年9月10日に設置されました。

幹事

女学校の幹事職は3名の日本人男性；K・Y・藤生牧師、Y・佐伯氏、T・早坂氏〔藤生金六、佐伯陽一、早坂哲郎〕が務めてきました。前述の最後の者は、女学校創設時以来、女学校との関わりを持つ人物です。



新寄宿舎全景 1903年9月落成



建築中のファウスト記念館(第一校舎)

教職員

現在、教職員は4名の未婚婦人宣教師、日本人男性7名、日本人女性6名で、この中の最後の1名のみが、わが校の卒業生です。



1903年時の宮城女学校の日本人教員たち

成果

ここに至るまでの種蒔きと水を与え育て続けた年月、私たちの期待を超える生徒数の増加によって、神は私たちの働きを豊かな恵みをもって祝してくださいました。25年前、この帝国全土には、日本人女性、教師、バイブル・ウーマン、母親の誰一人として、アメリカ合衆国改革派教会と最小の関係すら持っていませんでした。しかし今、周りを見回して見ると強力な力が働いて数々の素晴らしい変化がもたらされました。ある卒業生は日本人のキリスト者と結婚するために、遙か遠くのブルックリン N・Y・へ渡航し、また別の女性はホノルルで日本人牧師の妻となり、また1人は、日本の最北端の地で、現地の先住民アイヌの人々の間で活動している日本人の妻となりました。さらに、神戸で幼稚園の立派な教師となった女性もいます。また、数名は著名な指導者の妻となって西日本地域で暮らしています。別の5名は、宮城女学校の熱心な教師となり、その他多くは篤い信仰心を持つバイブル・ウーマンとなって、仙台、東京、山形の三地域に任命されました。1人は東北学院の日本人校長の妻に、多数は私たちの伝道師の忍耐強い妻に、他の者は役人の妻となりました。このように、かつて神の全能の力とイエス・キリストの贖いの愛について何も知らずにわが女学校に入学して来た娘たちが、やがてキリスト者の妻として、キリスト者の母親として、キリスト者の教師として、異教徒たちの暗闇の中にあって周りの闇を照らす光となっています。今では、家族の祭壇が偶像崇拜の神棚に代わって置かれ、幼い子どもらが、無言の木造や石造の偶像の前でその小さな手を合わせて叩く代わりに、たどたどしい片言で‘イエス’の名を呼び、天国の神に祈りを捧げる姿に出会うのです。過去6、7年間に日本で生まれた20人の子どもの母親たちは宮城女学校の卒業生です(ママ)。その他多くの娘たちは卒業こそしませんでした。彼女らの魂にはより高邁な理念が浸透していました。子どもたちが自ら祈る日が来るまで、母親は彼らのために祈り続けます。いつの日か、彼女ら自身が子どもらにイエスと彼の愛について教えることができた時、この女性たちにとってどんなに大きな喜びとなることでしょうか！3人の子どもの母親は、次のように書き記しています。「神の恵みによって、私は喜びのうちに私の勤めを行い、子どもたちを主の愛する子として育てるよう努めています。宮城女学校に入学していなかったなら、私の世界観や人生観は今とは大きく異なり、現在の私とは全く違う女性になっていたことでしょう。」51名の娘たちがこの学校を卒業し、その中の1人を除いて全員が卒業の時にはキリスト者になっていました。2人は、救い主イエス・キリストにあって希望と喜びのうちに死を迎えて永遠の眠りにつきました。



京田せつ(宮城女学校第3回生)
幼稚園の教師

今後の発展の可能性

宮城女学校は、今はまだ幼少期にあります。未来にはなお一層の発展を期待しています。現在の学生 120 名が、今後どのように遠大な影響力を発揮するかを誰が予想できるでしょうか？この活動の進捗は、時に遅く感じられますが、後ろを振り返って見れば我々の努力の跡は自ずとはっきり示されています。まさに、「命令に命令、規則に規則」（イザヤ書 28：10）です。しかし、未だしなければならぬことは山積しています。私たちの手が届いていない日本の娘たちは未だに沢山います。今日に至るまで、この活動のためにあらゆる方面で支援の手を差し伸べて来てくださった全ての皆さまに、神の恩寵がありますように。そしてまた、神が今後も変わりなくこの女学校を祝し、多くの人々の心を動かして、さらにこの活動を支援してくださいますように。私たちが日本の女性の地位向上を図ることは、ただ単にこの国に留まることなく全世界の人々の人間性の向上に貢献するものと考えます。



パーヴェル、ズーフル、ワイドナー



校旗

キリストの地上での生涯において、イエスの身の回りの世話をし、十字架のもとに最後まで留まり、次の日の早朝に埋葬された墓場を最初に訪れた慎ましい婦人たちが存在していたように、いま、日本においても数人の女性たちがイエスの子どもたちの世話をしています。まさに主のみ言葉「これらの私の貧しい兄弟の一人に汝が成したことは、私にしたと同じである」(マタイによる福音書 25 : 40) を彼女らは身をもって示しています。

生徒数の増加

バイブル・ウーマンの活動の評価は、女学校の卒業生数の増加に反映して高まりました。8年前、婦人宣教師のヘルパー〔外国人宣教師の助手〕の数は多くて2名、バイブル・ウーマンは2、3名しかいませんでした。しかし現在は、ヘルパー4名、バイブル・ウーマン13名と増えて、その中の3名を除く全員がこの女学校の卒業生で占められています。

活動の多様性

仙台市内や近郊での日曜学校、定期的な教会礼拝、婦人会、祈祷会、特別伝道集会が行なわれる場所にはどこへでも、バイブル・ウーマンはいつでも率先して手伝ってくれます。元来日本人は音楽好きで、特にバイブル・ウーマンは在学中その方面で優れた教育を受けているので、こうした教会の様々な奉仕活動には、なくてはならない貴重な存在となっています。

日曜学校

バイブル・ウーマンが指導する日曜学校活動は、かなり広範囲にわたっています。私たち所属の外国伝道局と関わりのある日曜学校は20箇所あり、そのほとんどに2人、他では3ないし5人のバイブル・ウーマンがついています。日曜の朝、この全ての場所に時間に間に合うように行くためには、仙台を6時には出なければなりません。従って、彼女らは夕方まで帰宅できません。バイブル・ウーマンは日曜学校の指導を手伝いますが、場合によっては全てを1人でしなければなりません。彼女たちはオルガンを弾き、‘主を称えよ’や他の救いの讃美歌などを子どもらに教えます。子どもたちがイエスやイエスの愛の物語を生まれて初めて耳にするのは、多くの場合こうしたバイブル・ウーマンの口を通してです。数年後に実を結ぶことになる真実の種は、このようにして神の幼な子らの心に蒔かれていきます。あらゆる階層の家庭の子どもたちがこうした日曜学校にやってきました。これらの子どもたちを介してバイブル・ウーマンを自宅に招くようになります。親の中には、自分の子どもが日曜学校に通っていることさえ知らず、それが分かると子どもに日曜学校へ行くのを禁ずる親がしばしばいるので、家庭訪問をする時には訪ねる側の配慮が必要となります。また、バイブル・ウーマンの影響を受けて、日曜学校に通っていた少女たちが宮城女学校への進路を見つけ、バイブル・ウーマンのように自分も将来役に立つ人間

になるための訓練を受けたいと思うようになります。「汝のパンを水に投げよ。そうすればいつか汝もそれを見いだすであろう」(コヘレトの言葉 11 : 1)

婦人集会

大きな影響を与えるもう一つの活動は、婦人集会の活動です。婦人宣教師教師(ママ)、若しくは宣教師の妻が集会の全般的な指示を与え、その指示のもと、バイブル・ウーマンが実際に指導します。このような集会では、少し内気な女性がバイブル・ウーマンに心を開く姿がよく見受けられます。それは福音書の講話をするバイブル・ウーマンが自分と同じ日本人女性で、彼女らなら女性特有の難しい問題も理解してくれると考えるからです。こうした集会に出席する人たちは、自宅への訪問も自然に受け入れるようになります。

キリスト者へ導くための素地

日本の女性の中には、多くの迷信によって精神的に束縛されている気の毒な女性たちがいます。ある女性は子どもが言うことを聞かない時、部屋中を100回行ったり来たり歩き回り、子どもが従順な子になるよう祈りながら、偶像の前に置いた器の中に豆を一粒ずつ入れて歩きます。また、別の女性は子どもが病気になると、子どもの病気回復を願って自分の好物の食べ物を断つ誓いを家の氏神様に立てたりします。こうした迷信に捉われた女性たちに、より良い生き方を理解させ、目に見えない唯一の神を信じさせ、神は「‘霊’であり、神を崇める者は霊と真をもって崇めなければならない」(ヨハネによる福音書4章24節)ことを明確に説くのは容易なことではありません。しかし、バイブル・ウーマンが女性たちとより親しくなって彼女らの信仰、家庭生活、個々の苦しみを知るとなれば、彼女らに熱心に働きかけ、彼女らのためにより賢明に祈ることができます。やが



バイブル・ウーマンの宿舎

て、バイブル・ウーマンによる辛抱と忍耐の数週間にわたる聖書の講話を続けた結果、ついに、キリスト教の信徒として受け入れてもらうために洗礼を受け、今度は、バイブル・ウーマンに代わって彼女自らが良き訪れを友人に伝え、家族には神の恵みを伝える使者となる姿を見て、バイブル・ウーマンは大きな喜びを味わうのです。バイブル・ウーマンにとって、自らの働きによってこのように実り豊かな成果を得る機会が与えられることは、なんと素晴らしい恩恵でしょう！このように信仰の篤い女性たちは、イエスの全人類に対する愛について日曜学校の子供たちや婦人集会の母親たちに宣べ伝えているのです。

特別な活動

バイブル・ウーマンには、時々様々な活動の依頼があります。婦人宣教師が婦人集会や子ども会のために区域外の伝道所へ出かけることがあります。そのような時はいつもヘルパーかバイブル・ウーマンが同行し、通訳をし、彼女ら自身も話をして集会の手助けをします。時には集会の参加者が予想を超えて大勢来た時などは、彼女らが居てくれるので非常に助かります。私たちは当地にいる同労者を支援するために来日したのですが、自らも家庭訪問の大事な任務がありますので、ヘルパーやバイブル・ウーマンたちに私たちの活動の手伝いを頼むことがあります。単独か、或いは外国人婦人に同行するかによらず、バイブル・ウーマンの活動の役目は極めて大きいのです。



1903年10月14日～16日に開催された第一回婦人活動者会議

伝道師の妻として

バイブル・ウーマンの中には伝道師と結婚する者もあり、婚姻後は厳密にはバイブル・ウーマンと呼ばれることはありませんが、真のキリスト者活動家として活動を続けます。

婦人活動家の会議

在日宣教師社団に関わる伝道師の妻やバイブル・ウーマンらすべての婦人活動家のために、1903年10月14日から16日に仙台の二番丁教会で会議が開催されました。私たちにとってこのような会議は初めてのことでしたので、出席者全員、特に支部からの参加者にとっては英気を新たにする良い機会でした。修練では祈祷会、研究課題についてのレポートの読書会、討論会があり、終始有益な内容でした。この会議では参加者間の相互理解と共感が生まれ、さらに、日本における「キリストのみ国」の業を推し進めるための一歩であると感じました。

バイブル・ウーマンのための祈り

過ぎし数年間、バイブル・ウーマンたちは、尊い福音の種を蒔き、主のみ国のために人々を導いて来ました。しかし、彼女たちの奉仕活動がどれほど崇高でいかに遠大なものであったかを、私たちは「最後の大いなる日」において初めて知ることでしょう。このレポートを読む全ての方々が、「主のみ座」の前のバイブル・ウーマンと彼女らの活動を心に覚えてくださることを願います。そして、いつの日か、日本の人々がキリストを彼らの主であり、王として認める日の実現のために、今後もバイブル・ウーマンが神の大いなる業の担い手として用いられますよう祈ります。

活動の始まり

数年前のある午後、仙台の我が家に幼い女の子がやって来て、近所に住む瀕死の状態にある人を助けて欲しいと言って来ました。気の毒さと好奇心と苦しんでいる人を助けたいという複雑な思いで私はその人が住む小屋（住宅とは言えない）へ行きました。しかし、私がそこに着いた時には、もうすでに病人は息を引き取っていて、この世の苦しみから解放放たれていました。彼の寝床は古びた薪小屋の固く冷たいむき出しの床で、覆いものが厚紙だったことを思えば、日頃の彼の苦しみがいかばかりであったか想像に難くありません。

あの小屋とその住人の光景を私は生涯決して忘れることはないでしょう。この出来事がきっかけで、極貧生活の中で打ちひしがれ、絶望の淵にいる仙台の人々の中で奉仕活動を始めることになりました。

実施のための組織づくり

やがて、この事例が多くの中の一例に過ぎないことが分かりました。しかし、そのように大掛かりな活動を1人で実行するには、自分が余りにも無力だと痛感したので、宗派を問わず支援の手を差し伸べてくれる在仙の教会に相談をし、各教会から2名ずつ教会員に協力を求めることになりました。間もなく慈善協会が結成されました。赤貧にある人たちは、人を助けたいと思っている人からは進んで援助を受ける、ということが分かりましたので、私たちは願い出た全ての人を訪ね、彼らが真に生計が立てられないほど困窮しているかを調べることにしました。その年の冬、私たちは雨と寒さと雪と泥の中を、支援する住民の家々を何度も訪ねて回りました。その結果、私たちは一つのことを気付かされたのです。それは彼らに福音書を説く前に、まず病人には薬を、空腹の者には食べ物を、裸の者には着るものを、冷たい床に寝ている者には暖かい寝具を与えることこそ、私たちが真っ先にしなければならないということでした。体を病み、空腹と寒さで体が凍えている人、寝床のない人たちには、肉体的な苦しみのない人とは違い、福音の真実を容易に理解することはできません。

興味深い思い出

あの厳しく辛い冬を振り返ると、幾多の惨めながらも楽しい思い出が心に甦ってきます。特に鮮明に心に浮かぶのは、年老いた夫婦とその親族3人にまつわるものです。彼らは、アメリカの農民が家畜を飼うことすらためらうような古ぼけた小屋に住んでいました。床はむき出しの土間で、壁には数枚の古いむしろが掛けてあり、それを通して昼間の

嵐や夜間の突風が唸りをあげて小屋の中に容赦なく吹き込み、おまけに屋根は穴だらけで雪や雨がでこぼこの土間のそこそこに水たまりを作っていました。その赤貧の人たちは、日夜‘わらじ’という藁で編んだ安物の履物を作って生計を立てていたのですが、高齢に加え、餓死寸前の空腹と寒さと苦痛で疲れ果て、仕事は一向にはかどらず、‘わらじ’は少ししか作ることができませんでした。そこで私たちは、アメリカの友人から送られてきたフランネルの柔らかく暖かい布地を使って、早速彼らのために長着を作りました。彼らは冷え切った体をそれで覆って見たり、嬉々として子どものようにどれにしようかと言いつけ合う様子が可笑しくて笑いを誘いました。



1903年12月 仙台自営救貧所入所者と共に

宮城病院

宮城病院〔現東北大学附属病院〕に勤務するキリスト者の日本人医師は、私たちの病院伝道活動に非常に協力的でした。治療を受けに病院へ行くほどの体力がなく自宅で寝たきりの病人の面倒を彼はよく見てくれました。約6年の仙台滞在期間中、私はこの病院に通い自由に入院患者たちを訪ね、一緒にお話をしたり、彼らのために歌を唄ったり、食欲が出るような美味しい食べ物を持参したりしました。この間に、多くの人が救い主に信仰を誓って受洗しました。残念ですが、紙面の都合によりこの病院で行われた伝道活動の詳細については省略させていただきます。

仙台宣教師救済委員会

私たちの在日宣教師社団以外の会員も、機会が提供されれば仙台で奉仕活動を行っていました。その中の2人が救済の必要な貧しい境遇にある人の世話をする施設を開設するた

めに 50 ドル近くの寄付を集めることができました。後日、この基金は在仙の全プロテスタント宣教師の団体が慈善活動を組織的に推進させるために救済委員会を設置した時にその新しい団体に引き継がれることになりました。そしてついに、救済委員会は‘貧民の家’の設立に漕ぎ着けました。この施設では、支援を必要とする人に仕事、食事、住居を提供し、宗教的な指導も行います。団体の会員は、募金を集めたり慈善訪問を行う等この事業に関わる全ての活動を行います。この活動は単に婦人だけのものではなく、男性も多くの役割を担っています。

1896 年の大津波〔明治 29 年、明治三陸地震津波〕

私たちが仙台在住の間、1896 年 6 月 15 日の大津波が日本の東北沿岸を襲い、約 35,000 人の命が奪われ、負傷者と家屋を失った者の数はそれを優に超えていました。モール氏と私の 2 名が、被災した沿岸に赴いて罹災者支援にあたる役目を任せられました。宮城県知事からの書簡を携帯し、町村を移動する際の案内役として警察官数名が同行しました。この時に私たちが見聞きした光景や騒音を二度と再び体験することがないように願うばかりです。村のほとんど全てが流出されてしまった場所や、波が内陸部 2 マイル〔約 32km〕にまで到達し、ある地点では、標高 80 フィート〔約 24m〕にまで達していたことが、高木の枝々に引っかかっている残骸が無残にも示していました。よく見ると、こちらには小さな‘ゲタ’（木製の履物）の片方が、あちらには引きちぎられた髪の毛の束や、倒壊した家の家具の一部などが散乱し、それらがかつて繁栄していた漁村に残された全てと知って、哀れで胸が押しつぶされそうでした。町の荒廃したそのような姿は真に無残なものでした。海岸沿いに建設中の急ごしらえの仮設病院と騒音が悲痛さを誘いました。私たちは病人と、家を失った人々の苦痛を少しでも和らげようと最善を尽すしかありませんでした。また、このために心ある友人たちから贈られてきた災害見舞金で、知事が持参すべき必需品について予め知らせてくれていた物資を取りあえず購入し、かなりの物品を持参することができました。この任務は心身両面で辛く耐え難いものでしたが、宮城県沿岸のこの大津波の被災地で過ごした 10 日間ほど、真から幸せに感じたことはありません。まさにそれは、「受けるよりも与えることの方がより祝福されている」(使徒言行録 20 章 35 節) ことを実感できたからです。小さな津波の‘ルース赤ちゃん’が見つかったのは紛れもなくこの場所でした。改革派教会機関紙の多くの読者は、その子の物語をすでにご存知かと思しますので、ここでは彼女について重ねて記す事はいたしません。

日清戦争

日本と中国との戦争〔1894（明治 27）年 7 月 25 日～1895（明治 28）年 4 月 17 日〕が勃発したのも私たちが仙台に住んでいる間のことでした。陸軍病院で傷病兵の中で過ごした時間は大変興味深く、周囲が病人や苦しんでいる人たちで溢れていたにもかかわらず、

本当に楽しいものでした。「汝がわたしの兄弟姉妹に行ったのは、私に行ったと同じである」(マタイによる福音書 25 章 40 節) という真実の言葉を表すものだからです。病院の院長は、当初私たちの活動に対してかなり反感を持っていましたが、それも徐々に薄れ、ついに病院の門戸が開かれて、私たちは自由に出入りできるようになりました。お正月には数多くの宣教師や日本人のキリスト者たちがこの活動に加わり、富裕な日本人や活動に関心のある人たちから寛大な献金が寄せられ、3,000 人の病床にある兵士たちにその容態に応じたご馳走を振る舞うことができました。気の毒な兵士たちがご馳走を美味しそうに頬張る姿を見て、本当に幸せでした。その後、特別に彼らのために印刷した 3,000 冊の聖書を贈り、加えて赤十字の小冊子も配布されました。そして、あれほどキリスト教を忌み嫌っていた医師が、立派に装丁された新約聖書を贈られ感謝の礼を述べて受け取りました。その冬の病院伝道活動によって兵士たちは「仙台軍人クラブ」をつくり、その結果数多くの兵士が受洗して教会員となりました。

山形における病院伝道活動

山形に滞在中、山形県立病院への出入りを許可されたので、約二年間その病院での伝道活動を行ないました。主な活動は、患者の間のキリスト教へ改宗して洗礼を受けた人と、その後の成果を確認し、医師や看護婦の洗礼の場に立ち会うことでした。紙面の関係でこの活動についての詳細をここで記すことはできませんが、その思い出は今でも大きな喜びを与えてくれます。

婦人の活動 宮城女学校の婦人宣教師教師による伝道活動 ミス・ルーシー・マーガレット・パーウェル

日本人の家族と親しくなる機会

外国人婦人宣教師教師は、直接伝道活動のための時間がもう少し欲しいと望んでいます。通学生の中には、大きな影響力を持つ地元の有力者の子女が多くいます。これまで私たちが日本人の家庭に出入りできるようになったのは、教え子を介してだけでした。現在、わが校の評判も良くなり、私たちが家庭訪問をする機会も大幅に増えました。私たちの訪問を受け入れてくれるばかりでなく、彼らの家庭に招いてくれるようにもなりました。教え子たちから私たちが最初に学んだ英語表現の一つは、「私の家に来てください」という言葉でした。こうした自宅への熱心な招待を、しばしば無理に断らねばならないことは私たちにとって耐え難い苦痛でした。私たちは出来るだけ全生徒の家庭を訪問するように努めていたからです。生徒の家庭環境を少しでも多く知ることは、私たちにとって重要な意味を持つと考えます。それによって、私たちが生徒をより良く理解し、生徒にもっと多くの援助の手を差し伸べることができるからです。

ある訪問の事例

婦人教師がある生徒の家を訪ねた時のことです。人力車から教師が降りる姿を目ざとく見つけたのは、門の近くで遊んでいたおそらく生徒の弟でした。外国人のセンセイ（先生）の到着を家族に知らせるために、その子は慌てて下駄か裸足のまま全速力で家の中に飛んで行きました。玄関では、生徒の母親と生徒自身と生徒の父親までもが勢揃いして出迎え、そのまま直ぐにその家の一番立派な部屋に案内されます。それから心からの歓迎を受け、日頃の娘への好意に対して両親は深く礼を述べるのでした。時には、家庭が貧しく通される部屋の広さが6平方フィート（3畳）にも満たない、家業で使用されていない唯一の部屋のこともあります。裕福な家庭の場合、通される応接間は日当りの良い、絹のクッションや毛皮製の敷物が敷かれた美しい部屋で、そこからは日本人庭師によってゆきとどいた手入れがされた広々とした見事な庭を見渡すことができます。しかし、住まいの造作の如何によらず、目の前にはお茶の入った小さな茶碗と、この家が用意できる選りすぐりの茶菓が置かれています。少しでも肌寒ければ火鉢（火箱）が用意されます。火鉢は丸い形状をしていて、床を覆っている分厚い畳の上に全員で座ります。こうした家庭訪問は私たちに多くのことを明確に示してくれます。それは、女生徒の今後の歩むべき道を示し私たちが彼女をその道へ導くための一助となるからです。つまり、女生徒が女学校での困難な専門的学業に耐えられるよう私たちが優しく助言を与え、またキリスト教の教えを説く時は率直な言葉で話し、女生徒が自分の立場をわきまえ、私たちをより良く理解できるよう彼らの娘を導いて欲しいということです。日曜学校への直接的な勧誘は、大抵受け入

れてくれるようになります。「日曜学校には誰が行ってもいいの?」と時々聞かれることがあります。そのやり取りの成果は、後日、生徒の弟や妹たちが日曜学校に出席する形となって表れます。また、別の事例では、キリスト教に関心を持っているある高齢の男性に、キリストの教えについて誰かを説明に行かせましょうか、と提案してみると、彼は喜んでその申し出を受け入れ、その結果、彼はいま受洗に向けての準備をしています。私たちがいとま乞いをする時、「外国人の先生がわざわざ来てくれて、なんて幸せなことか」と言って興味津々の隣人たちまでがその家の門の前に集まってくるのがよくあります。彼らもまた、同じように私たちと懇意になりたいと願っているのです。このように、一つの家庭訪問が、私たちの次の訪問への扉を開けるきっかけとなりました。



外国人婦人宣教師のヘルパーたち

伊藤みさほ(宮城女学校第10回生)、奥山ます(同)、藤沢やす(同11回生)、鈴木さだ(同9回生)

市外地域訪問によるキリスト教への関心の増加

女学生の多くは仙台の市外地から来ています。中にはクリスチャン・ホームの子女たちもいますが、恐らく近隣で唯一のクリスチャン・ホームで、大多数はキリスト者ではありません。しかし、この子らは通例入学後2、3年以内に改宗してキリスト者になります。遠距離出身の生徒たちも私たちが家に招待し、その家庭訪問は大抵実り多い成果をもたらします。私たちの活動には卒業生が1人同行して一緒に讃美歌や小型オルガンを運ぶ手伝いをしてくれます。卒業生の立ち居振る舞いや、歌ったり、オルガンを弾いたり、通訳をする彼女らの姿と技量など全てが、女学校のために良い影響を及ぼします。自然に親たちは私たちに快く会うようになり、友人や親類にも進んで私たちを紹介し、公共での伝道集会を開催するよう度々依頼して来るようになります。その集会では、生まれて初めて聞くキ

リストのお話しが語られます。また集会に来る出席者の殆んどがキリスト者なら、女性にとってキリスト教教育がいかに重要であるかを力説できます。このようにして親たちはわが女学校に関心を持つようになり、自分の娘をこの女学校に入学させて友人にも同じように勧めます。しかし、多くの人がキリスト教に興味を抱き、キリスト者教師に面談を求めに来て、宣教師の数が不足しているために、その希望をかなえてあげることができません。このように、一つの訪問が、結果として新たな訪問の機会をもたらすこととなります。

在仙の他校での活動の可能性

仙台はこの地方では教育の中心地であり、生徒の兄弟や多くの友人らは在仙の公立学校に入るためにこの町にやって来て、町の近辺の特段良い影響を与えそうもない民家に下宿します。私たちは、何とか彼らに援助の手を差し伸べたいと強く願っています。その上、この町にはいくつか大きな病院があり、わが校の生徒の友人が治療のために暫く入院することがあります。私たちの宣教とは関わりのない病院もまた、キリスト教の布教活動にとって素晴らしい機会と場を提供してくれると考えます。

日曜学校活動

婦人宣教師教師は、仙台及び近隣の町で日曜学校の監督と管理責任を負っています。

婦人集会

女学校の外国人婦人教師は、婦人集会に関心を持ち、時には自ら出席はしても、日本人活動家に指示を与えることは控えるのが通例です。

間接的活動

私たちができる最も効果的な伝道活動の方法は、間接的方法です。つまり、日本人活動家に助言をし指示を与えることです。日本のキリスト教伝道は、主として日本人活動家によります。私たちは彼らを訓練し、いかに生き、何をすべきかを一言一句教えることによって最善の務めを果たすことはできないでしょうか？日本の娘たちにとって、自国の姉妹たちから教えを受けてキリストへ導かれるのが最善ではないでしょうか？なぜなら、彼女らは同じ国民として後輩の考え方を理解し、同じ苦難を経験し、同じ障害を乗り越えてきたからこそ、真に必要なものが何かを理解できると思うからです。

役人のグループの中で

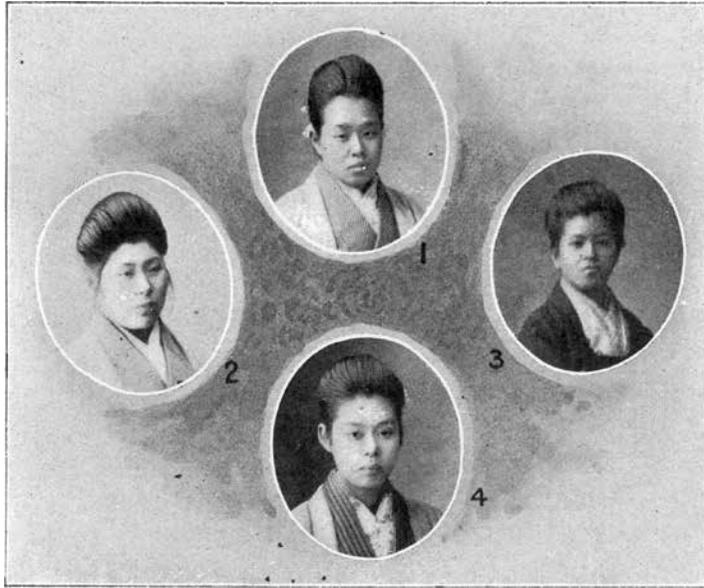
私たちが居住する仙台市の官職にある人たちの間で活動する機会がありました。ある時、数人の特権層の来賓が、あるクリスチャン・スクールを支持して公共の意見に敢然と反対して以来、今では私たちは町の役人たちの自宅に招待されるようになりました。そ

れ以候、私たちばかりではなく、私たちの仲間も同じように受け入れられるようになり、学校訪問の特別招待状が送られるようになりました。かくして、女学校の校舎が火事で全焼した時には、彼らの方から女生徒たちのために一時避難所が提供されることになりました。しかし、今はまだ、彼らとのこうした付き合いは、私たちが神の子であるが故に望まれている訳ではありません。願わくは、神が私たちをして神のみ名の栄光を表させ、彼らが私たちの内に神のみ姿を見て、全人類の父なる神として愛し、崇めるようにならんことを！

好機はあらゆるところに

こうして、常に、私たちがどちらを向こうと、キリスト者として仕える機会が常に私たちを窺っています。喜んで受け入れられる人がいる一方、ああ、何と多くの人が素通りするままにあることでしょう！神はかつて蒔かれた幾多の種を、豊かに実らせて祝福されました。未来においても、主のみ名によって、愛するみ子のために行われる業を、神が惜しみなく祝福されることでしょう。

婦人の活動 宣教師、牧師、伝道師の妻たちの伝道活動
D・B・シュネーダー夫人



バイブル・ウーマンたち

- 1.狩野みどり(宮城女学校第9回生) 3.イチムラセキ(不明)
2.高橋なみ(同10回生) 4.丹羽こま(同10回生)

海外事務局の訓令

私はこの在日宣教師社団で奉職する既婚夫人の中で最年長者の一人として、宣教師、牧師、伝道師の妻たちの活動について書くよう依頼されました。今から16年前、ペンシルヴァニア州サン・バリーでの送別礼拝において、海外伝道局から次のような訓示がありました。それは、「あなたの夫の面倒をよく見ること」でした。他の全ての御夫人方も同様の言葉を受けたものと確信しています。この務めを私は忠実に果たすよう努力してまいりました。そして他の方々も同様に遂行されたことと確信いたしております。

さらなる勤め

けれども、宣教師、牧師、伝道師の妻たちには、ただ単に夫の世話をしたり、家事に専念するだけに留まらない、遥かに多くの働きを果たすことができました。命の糧がないために飢えに苦しむ数多くの人々を周りに見ながら、妻としての勤めにのみ甘んじているわけにはいきませんでした。私たちはこの貧しい気の毒な境遇にある日本の姉妹たちを、何とかその暗闇の世界から命の光の世界へ導きたいと切望しました。

活動の詳細

私たちの中から1人が、いくつかの病院訪問と、傷病兵士たちの中での活動と、日曜学校活動のために各々の時間を充てることにしました。もう1人は、現在在日宣教師団に所属はしていませんが、当初からの本人の希望で多くの時間を後輩の教育と活動のための準備に当てました。しかし、彼女自身病気のために活動を休みがちでした。それにもかかわらず、この疲労困憊した母親は、夜に子どもたち全員を寝かしつけてから、彼女のクラスの女学生に聖書を教えるのが日課でした。さらに彼女は生徒たちとより親しくなるために、自分の夕べの数時間を充てていました。その上、日曜学校での活動やキリスト者とそれ以外の人たちへの家庭訪問も怠りませんでした。他の夫人たちも日曜学校活動の他に、信者ではない人のために自宅でバイブル・クラスを開いたり、病人や背教者や未信者を訪問し、信者を励まし、キリストへ導くための説得に努め、裁縫のサークルや祈祷会など、到底ここには書ききれないほど多くの奉仕活動に携わっています。牧師や伝道師の妻には実に広範囲に及ぶ大切な役目があり、活動を通して関わった婦人たちに、彼女らは計り知れない影響を与えています。特に、子どもの母親と親しくなることができれば、やがてそれは彼女らの愛と信頼を得ることに繋がっていきます。

後輩の活動

新しく着任する宣教師の妻たちは、日本語を話さずとも、良き知らせを広める目的に向かって既に行動を開始しています。「彼女たちに何ができるのでしょうか？」と尋ねられたなら、そうですね、歌を教え（日本人は歌うのが大好きです）、集会ではオルガンを弾き、日曜学校に出席した幼い子どもたちに向かって微笑みだけで充分なのです！外国人の女性に会って優しく微笑みかけられたなら、子どもたちにとってそれにまさる励ましはないからです。彼女らに備わった声もまた、これまでの活動に大きな助けとなってきました。

日本人婦人活動家への祈り

日本の牧師や伝道師の妻たちのほとんどは、歌が歌えてオルガンが弾けるので、それによって夫の活動に大きな味方となっています。彼女たちは外国人宣教師の妻とほとんど変わらず同じ仕事をします。数多くの失望に遭遇しますが、一步一步、少しずつ道を探しつつ彼女たちは勇敢に前進しています。皆さまの憐れみと祈りが彼女たちには必要です。どうか、神の玉座に跪く彼女らを皆さまの祈りの中で覚えてください。

この短いレポートが、日本におけるキリストのみ国のために尽力される皆さま方に、更なる激励を与えてくれますようお願いしながら、神のみ名によって提出いたします。